2023 年7月2日 久宝教会 聖霊降臨節 第6主日礼拝メッセージ
「あなたと私をつなぐもの」 牛田匡牧師
聖書 ルツ記 1章 1−22節

先月 6 月 16 日に、国会で「性的指向及びジェンダー・アイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律案（LGBT理解増進法案）」が可決されました。性の多様性についての「理解を増進する」というと聞こえは良いのですが、元々の法案は「差別禁止法案」でした。それが審議の過程で「理解増進法」にすり替えられたということ自体が、国会内外に根強い差別があることをハッキリ示しています。この法案は 6 年前から何度も検討され続けていましたが、その度に強く反対されては立ち消えになっていました。例えば 21 年の東京オリンピック・パラリンピックの際にも、五輪憲章に「性的指向を含むいかなる差別も受けない権利と自由」が謳われていることを踏まえて、議論されましたが不成立でした。

また今年 5 月に広島で開催された G7 サミット(主要国首脳会議)では、G7 の中で日本だけが同性カップルを家族と認める国レベルの法的保障がなかったこともあり、開催前に米欧やオーストラリアなど 15 の在日外国公館から、LGBT など性的少数者の差別反対と権利擁護を盛り込んだ法整備を日本政府に呼びかけるビデオメッセージが出されるという前代未聞の有り様でした。つまり、国際的に見て、日本は未だに差別をし続けている国と理解されているというわけです。先日、世界経済フォーラム（WEF）から発表された 2023 年版の「Global Gender Gap Report」（世界男女格差報告書）の中では、日本のジェンダー・ギャップ指数は、年々順位を下げており、昨年は 146 カ国中 116 位でしたが、今年は 9 ランクダウンの 125 位でした。これは「社会的な法整備がなされていないので、男女格差が埋まっていない」ということよりも、むしろ「一人一人の中の差別意識が無くなっていない」そもそも「差別している自覚がない、自分の足が誰かの足を踏んでいることに気付いていない」ということを表しているのではないかと思います。

世界各国から発破をかけられて、ようやく性の多様性を認める法整備に向けて、重い腰を上げた国会でしたが、紆余曲折の末に成立したのは、先に述べたように「差別禁止法」ではなく、「理解増進法」でした。当初の案では、性的指向や性自認を理由とした「差別はあってはならない」とされていたところが、「不当な差別はあってはならない」と変更されています。では「不当でない差別」などあるのでしょうか。このように文言を変更せずにはいられない人たちの中には、「私や私の周りの人たちは LBGT ではないので、その人たちに対して『不当な差別はしていない』」という思い込みがあるのだと思いますが、自分たちと「その人たち」を違う存在だと線引きしていること自体が差別であり、相手を生きづらくさせている圧力になっているということに気付く必要があります。また原案には無かった「全ての国民の安心に留意する」、「そのための指針を定める」という条文も新設されています。これは差別され、足を踏まれている少数派の人たちが安心できるようにというのではなく、相手の足を踏んづけている側の多数派の人たちが、過ごしにくくなら

ないように、これまで通り安心していられるように配慮しなさいというものですので、審議の過程でいつの間にか中身が「差別推進法」にすり替えられてしまいました。今回の法制化に対して、早速、多くの活動団体から反対声明を発表されていますし、日本基督教団内でも京都教区宣教部が「『LGBT理解増進法』をめぐる性的マイノリティ差別とヘイトスピーチへの反対声明」を発表しています。今後の動きに注目していかねばなりません。

それでは、聖書は「性の多様性」について、どのように述べているでしょうか。聖書の冒頭「創世記」において、神様がこの世界を創られた時、神様は「昼と夜を作った」（1:5）、そして「夕べがあり、朝があった」と書かれています。しかし、私たちは神様が創られたこの地球に暮らしていて、生活実感として「昼と夜」の2つの他にも、それらの間に朝日が昇る前の夜が白む時間帯もあれば、夕焼けから始まって、薄暗くなって相手の見分けがつかなくなる「たそがれ時」もあるということを知っています。つまり、聖書の中に文字としては「昼と夜」の 2 語しか書いてなかったとしても、その行間には豊かな連続性、グラデーションがあるというわけです。同じように、神様は人間を「男と女」に作ったと書いてありますが、その行間にも虹色のようなグラデーションがあるのだということが言えるのでしょう。ちなみに「虹」ですが、日本語や韓国語では 7 色だそうですが、英語では 6 色ですし、フランス語ドイツ語では5色、ロシア語では 4 色なのだそうです。同じ物を見ても、文化によって感じ方、見え方は異なっている。逆に言えば、私たちはいつも自分の色眼鏡を通して、自分の価値観でしか物事を区別したり、判断したり出来ていない。そして、それは人と人とを区別し、差別することに容易につながっている。ですが、一旦、意識して自分の色眼鏡を外して見たら、神様が創られたこの世界は実は、もっともっと多様で豊かだということに気付くことができるのではないでしょうか。

さて、今回の聖書のお話は、ヘブライ語聖書の中の「ルツ記」でした。全体でも 4 章、わずか 7 頁しかない短い物語です。舞台は士師たちの時代、紀元前 11 世紀 12 世紀頃と考えられますが、お話の粗筋は簡潔で、異邦人であるモアブ人の女性ルツが、姑ナオミを助け支え、ベツレヘムの有力者であるボアズと再婚して出産することを通して、舅エリメレクと姑ナオミの家を途絶えさせずに済んだ、というものです。そしてそのルツとボアズの曾孫が古代イスラエル王国の有名なダビデ王です。そのため「マタイによる福音書」の冒頭 1 章のイエス様の系図の中にも、ルツの名前が登場します（1:5）。ユダの地に飢饉が起こったので、エリメレクとナオミの夫婦は、マフロンとキルヨンという2人の息子を連れて、故郷ベツレヘムを離れてモアブに移住したところから物語は始まります（ルツ 1:1-2）。そして、モアブの地でエリメレクは死んでしまいますが、2人の息子たちはそれぞれ、その地でモアブ人女性と結婚しました。その2人の嫁の名がオルパとルツでした。彼女たち 5 人はそこに十年ほど暮らしていましたが、子どもが生まれないまま、やがてマフロンとキルヨンも死んで、3 人の女性たちだけが残されました（3−5）。そこでナオミはモアブを離れて、故郷に戻ることを決意し2人の嫁に別れを告げましたが、オル

パがナオミと別れてモアブに残った一方、ルツはナオミと共にベツレヘムに行くことに決めました（6－18）。そしてこの後、ルツは異邦人であり、かつ夫に先立たれた寡婦という社会的に弱い立場にありながらも、ユダの地ベツレヘムで懸命に生きて、姑ナオミを支えて行きました。その中で様々な知恵を働かせて、舅エリメレクの親戚であり、ベツレヘムの有力者であるボアズに見初められて、再婚を果たします。そして最後は、ルツもナオミも幸せに暮らして「めでたし、めでたし」というお話になっています。ですが、このお話は異邦人であっても、イスラエルの神を信じて、その姑に献身的に尽くすことで、神様からの豊かな祝福が得られる、神様は古代イスラエル民族以外の異邦人にも、昔から恵みを与えておられた、というようにだけ受け止めていたら、それでよいのでしょうか。どうもそれだけではなさそうです。

モアブからベツレヘムに移るというのは、ナオミにとっては十数年ぶりの故国、故郷ということでしょうが、ルツにとっては、全くの異文化、外国です。大昔、アブラハムは神様からの祝福の約束、新しい土地、多くの子孫を与えるという約束をもらって、故郷を出発してまだ見ぬ約束の地を目指しましたが、ルツにはそのような神様の約束、それこそベツレヘムに行ったら住む家と畑があり、新たに子どもが与えられるなどという約束は何もありませんでした。ベツレヘムがどんな所か、何があるのか、何も知らないまま、彼女はただ姑ナオミについてベツレヘムに行きました。そもそもモアブの国は、聖書の中では、この「ルツ記」を除いて、あまりよい国や民として描かれていません。モアブはイスラエルに敵対している国であり、モアブ人は「神の会衆に加わってはいけない」（申命記 23:3－6、ネヘミヤ 13：1）として差別されていました。ナオミと一緒にベツレヘムにやってきたルツは、それこそ「白い目で見られた」こともあったでしょう。にもかかわらず、どうして彼女は、そんなにも頑張ることが出来たのでしょうか。それは寡婦となって身寄りのない姑を、嫁として助けなければならないという立場に基づいた義務感や責任感だったのでしょうか。それとも「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です」（ルツ 1:16）とあるように、信仰的な理由からだったのでしょうか。私はむしろもっと素朴に、ルツはナオミのことが大好きだったからではないかと想像しています。そもそもベツレヘムは、ナオミと先に亡くなった夫エリメレクの故郷ですから、親戚も友人もいたでしょう。エリメレクが亡くなった時点で帰ることも出来たのに、彼女は帰らなかった。それはイスラエルから見て敵対し、差別されている外国モアブに行ったということ、そしてモアブ人の女性を息子たちの嫁に迎えたということなど、様々な事情から、故郷に戻れなかったのではないかと思います。けれども、夫も二人の息子も亡くしてしまい、いよいよどうにもならなくなって、ベツレヘムに帰らざるを得なくなった……。ナオミにはそのような事情があったのではないでしょうか。そして、そんなナオミを一人にしてはおけないと、深く心を動かされたルツがいました。

1 章 14 節でナオミと別れの口づけをしたオルパとは対照的に、ルツは「抱きついて離れなかった」とありますが、元々の意味では「くっつく」「貼りつく」を意味するこの言葉（ダーバク）は、聖書の中では人と人との最も親密な関係性を表わす

言葉でもあります。「創世記」2 章 24 節には、「それゆえ、夫はその父と母を見放して、彼の妻と結び合い、二人は一体となる」（月本昭男訳）という言葉がありますが、ここで夫婦のパートナーシップを表わして「結び合う」と訳されている言葉が、ルツがナオミに「抱きついて離れなかった」と訳されている言葉です。また「ルツ記」の中では、「愛する（アーハブ）」という言葉は 1 回だけしか用いられていませんが、それも 4 章 15 節でベツレヘムの女性たちがナオミのために孫を出産したルツを褒めて言った「あなた（ナオミ）を愛する嫁」という言葉でした。

聖書の中に登場する女性たちの多くは、その名前すらも書き留められていません。女性は男性の財産、所有物として扱われ、子どもを産むことが責務であり、婚姻関係のみが女性の生活や身分を保障するものと見なされていました。そして、それらの道から外れ、女性だけで社会的に暮らして行くことが難しかった時代の中で、それらの逆風に抵抗して、女性たちが主体的に知恵と機転を用いて行動していくルツの物語は、男性中心、家父長制主義の色濃い聖書の中でも珍しいものです。そしてそのルツを支えた原動力となっていたのは、立場に基づく義務感や責任感ではなく、小難しい思想や信条でもなく、相手のことを放っておけない、大切したいと思う気持ち、相手のことが好きという気持ちだったのだと思います。「あなたと私をつなぐもの」……。私たち一人一人をつなぎ合わせ、本当に力の出し合える関係にさせるものは、やはり心の底から自然と湧き上がってくる素直な気持ちなのではないでしょうか。人工知能やロボットがますます進化、進出してくるこれからの時代、自分の本当の気持ちを我慢して、ひたすら忍耐して取り組むことの価値はますます下がっていくと思います。無理やり取り組んでいても成果は上がりませんし、それでは疲れ知らずの人工知能やロボットたちに適うはずがありません。むしろ人間がなすべきことは、機械にはない気持ちや、心の部分にこそ目を向けること以外にはありません。理屈や義務によるのではなく、「それが好き」「大切にしたい」という心からの気持ちだからこそ、八方ふさがりとしか思えないような状況の中でも、自由に柔軟な発想やひらめきが生まれ、行き詰ったと思う時にも、諦めてしまわずに何とか頑張ること、力を出すことが出来て、結果的に道を見つけることが出来る。私たちの力や予測を越える形で、神様の不思議な力も共に働かれる。そういうものではないかと思います。

「差別を無くすこと」についても同じです。生まれながらの差別者はいないはずです。自分と特定の人たちとの間に線引きをして、差別せずにはいられないのは何故か。そのように自分を線引きし、差別し、足を踏み付けるようにさせているものは何か。そのことを深く自分自身の本当の気持ちの奥深くを丁寧に見つめ返していった時に、相手を差別することよりも前に、自分自身が本当に求めていた何か、欲しがっていた何かが見えて来るのではないかと思います。神様が創られたこの多様性に満ちた世界の中で、私たちはそれぞれの思い込みや偏見、色眼鏡を外して、自分の中の気持ちにも素直に向き合っていけるように、そして周りの方々と一緒にこれからの日々をより豊かなものにしていけるようにと、導かれていきます。